

月刊 CDCガイドラインの最新情報をごくよりも早くお届けします！  
編集長／矢野邦夫

現在、新型インフルエンザ A (H1N1) が世界中に流行しているが、先進国においては重症化したり、死亡したりする患者は少ない。そのため、空港の検疫でみられた当初の重装備の個人防護具の装着は見直され、発熱外来のような特別な診療区域での診療は、各医療施設や診療所での診療に移行してきている。

このように、メキシコでみられた多くの死亡例による当初の恐怖は薄らいできているが、第二波への備えを怠ってはならない。過去のパンデミックでは第一波より第二波の方が数倍多い死亡者が発生し、その多くが細菌性肺炎を合併していた。したがって、細菌性肺炎対策を充実させなければならない。

このような背景から、CDC は 2009 年 6 月 9 日に「新型インフルエンザ A (H1N1) 流行期における 23 価肺炎球菌ワクチンの使用についての暫定ガイドライン」([http://www.cdc.gov/h1n1flu/guidance/p23v\\_h1n1.htm](http://www.cdc.gov/h1n1flu/guidance/p23v_h1n1.htm)) を公開した

ので、それを紹介する。

インフルエンザに感染すると細菌性市中肺炎に罹患しやすくなる。20 世紀のインフルエンザのパンデミックにおいては、二次性細菌性肺炎が重症化および死亡の主要な原因であり、肺炎球菌が最も頻度の高い病因として報告されている。重篤な肺炎球菌肺炎は季節性インフルエンザでも報告されており、米国では肺炎球菌がワクチンで防ぐことができる重症化および死亡の主な原因であった。

現在、新型インフルエンザ A (H1N1) の流行は急速に拡大している。CDC はインフルエンザの危険性、重症の程度、インフルエンザ患者での二次性細菌性肺炎の発病率に関する重要な情報を収集し続けている。現時点では新型インフルエンザ A の重症例（入院を必要とする患者など）における肺炎球菌感染の役割については不明であるが、インフルエンザの流行期では、肺炎球菌ワクチンは二次性肺炎球菌感染の予防および重症化と死

9月号  
第九十三回  
〈新型インフルエンザと肺炎球菌ワクチン〉

亡の軽減について有用かもしれない。したがって、下記の人々には、肺炎球菌ワクチンを接種するのが望ましい。

- 米国予防接種諮問委員会 (ACIP) の肺炎球菌ワクチンの使用についての勧告
- ① 65 歳以上には全員に接種
- ② 25~64 歳であっても下記の 1 つ以上の条件があれば接種
  - ・慢性心臓血管疾患（鬱血性心不全および心筋症）
  - ・慢性肺疾患（慢性閉塞性肺疾患、肺気腫）
  - ・糖尿病
  - ・アルコール中毒
  - ・肝硬変を含む慢性肝疾患
  - ・脳脊髄液漏
  - ・機能的または解剖学的無脾症（鎌状赤血球症および脾臓摘出など）
  - ・免疫不全（エム感染、白血病、リンパ腫、ホジキン病、多発性骨髄腫、一般悪性腫瘍、慢性腎不全、ネフローゼ症候群、ステロイドなどの免疫抑制剤を投与されている人、固形または骨髄移植を受けた人）
- ③ 19 歳〜64 歳であっても喫煙者や喘息患者には接種

米国における 65 歳以上の人々の肺炎球菌ワクチンの接種率は白人では 60%、黒人およびヒスパニックでは 40%ほどである (<http://www.cdc.gov/mmwr/preview/mmwrhtml/mm5145a3.htm>)。

日本では肺炎球菌ワクチンの助成がある自治体はあるものの、その接種率（約 5%）は米国には到底及ばず、ワクチンへの医療従事者および国民の関心が低いことが浮き彫りとなっている。新型インフルエンザの第二波に向けて、肺炎球菌ワクチンの接種率を上昇させ、多くの人命を救うことは我々の使命である。

プロフィール

やの・くにお  
県西部浜松医療センター 副院長 兼 感染症科長  
「ねころんで読める CDC ガイドライン（メディカ出版）」等、CDC 関連の編・訳書多数。  
● 今月の矢野編集長  
日本の肺炎球菌ワクチンの接種率はきわめて低い。浜松医療センターでは入院および外来患者に徹底的に接種してゆくこととなった！



\* 本記事は、病院感染対策の総合専門誌「INFECTION CONTROL」誌（メディカ出版）9号に掲載予定のものです。状況を考慮し、速報として web にて掲載しています。  
\* 本記事の無断引用・転載を禁じます。